

54号 木質ハイブリッド構法の実大火災実験

5年6月9日大臣認定未取得のH型鋼内臓集成材の実大火災実験が長野県斎藤木材工業の敷地内で、建築研究所、日集協を中心にして行われた。当日は消防車まで出動し物々しい警戒態勢のなかで、一時間耐火性能の可否を問う実験が行われた。実験体は5階建て公共共同住宅のワンスパン一戸の3.675mx3.675mの部分を使用、柱・梁はH型鋼を内蔵し、室内には更に柱と同じハイブリッド実験体、室内には通常生活に必要な平方メートルあたり30キロの可燃物を置き着火した。

11. 00	点火	室内温度	
110.3		500	
11.07		700	
11.10			ガラス割れる
11.12			水 煮えたぎる
11.13			ガラス
11.15	800		黒煙ガラス崩落 フラッシュオーバー 通常火災 20分
11.18			
11.19			外部木製梁に着火
11.20			内部鋼材温度 27.80
11.22	900		木材温度 100
11.25			隙間から炎 内部鋼材温度 60~70
11.35	850		鉄 60~70 木材 350
11.40			火力弱まる
11.45	650		鉄 柱 30 梁 85 下火
			燃え尽きる

可燃物は全て燃え尽き 35 分で鎮火

加害調査はホームページで公表

以上のように実大火災実験は大成功であった。これだと、なかに鉄をいれなくても、消えるのではないか。実験室での実験は、炉のなかで、バーナーで1時間加熱、更にそのまま実験体を据え置くため、炉内の温度の影響で燃え止っても、オキとして残り再度燃え上がる過酷の条件のためだ。鉄は不要かも知れぬ。

56号 新木場情報一1

新木場でお宝出張鑑定団

9月19日敬老の日、新木場センタービルで東京12チャンネルによる「お宝出張鑑定団」の録画撮影行われた。なぜ、新木場かといえば、テレビ局側から新木場の木材業者といえば分限者がおおい、さぞかし立派なお宝をお持ちのはず、ぜひ鑑定をさせて頂きたい。放送には新木場木材業界の現状を紹介する絵もいれる。是非協力願いたい。こんな申し入れがあり、問題の費用は会場費ほか若干の諸掛だけ負担してくれ。あとはこちらでと言う渡りに舟のはなし、ご相談の結果、新木場全体のPRが出来るならばと、引き受けた次第です。録画撮影には、司会は松尾伴内、長浜エリカ、鑑定人はおなじみの中島誠之助、北原照久、柴田光男の三氏の出演で行われた。出品は6点それぞれ、意味のあるものばかりで大盛況のうちに終了した。放映は10月11日12チャンネルテレビ東京をお楽しみに。

56号 新木場情報—2

新木場駅看板架け替えの御礼

かねてより、われわれ新木場住人のシンボルである新木場駅、誇りでもある駅の看板を新装した。昭和51年に移転した新木場は当初陸の孤島交通機関はなにもなく、各社が自前の通勤バスをして送迎していた。数年後に、都バスが開通したが、依然として陸の孤島状況が続いており、私達新木場業者はなんとしても鉄道新木場駅をと設置運動を行なってきた。

移転後12年目、昭和63年6月8日やっと地下鉄有楽町線が開通した。駅名も当初は東京湾岸駅などと言う名前でしたが、それでは新木場の名前が出ない。是非駅名を、新木場してくれと陳情した。この運動は先輩方のお力で実現した。

もう一つは、駅舎を木造化しよう。駅全体を木で作ってくれ。と運動しました。

新木場、木材屋の街のシンボルとしての、この新木場駅が鉄やコンクリートでは如何にも、木材屋の信念と違う事になるとして運動しました。外国では、木造駅舎の例が無数にあり、事故もなく安全に操業している。是非にとお願いしましたが、これは残念ながら実現しなかった。

しかば、駅のシンボルマークとしての、駅名の看板「新木場駅」と書かれた木の看板をつけて下さい。とお願いし當団からお許しを頂いた。

昭和63年當団地下鉄開通と同時に、木製看板を駅舎の外壁に設置した。以来17年傷みも激しくなったので、当時彫刻を頂いた岸本さんにお願いし、再生した。再生につきましては、新木場の関係者の皆さんには大変お世話になり、おかげさまにて立派な看板が出来ました。皆様に厚く御礼申しあげます。

新木場駅は新木場にいる木材業者のシンボルであります。

そしてこの、木の看板は我々木材屋の誇りであります。これを機会に、木場の木材業界の活況を期待申しあげ東京新木場木材商工協同組合理事長として
御礼のご挨拶と致します。

57号 愛・地球博

再度 愛・地球博を視察

9月18日、愛・地球博、開催185日、閉会一週間前、最後の日曜日に社員の皆さんと、再度視察した。木材でご飯を食べているものなら、木の万博といわれているこの愛・地球博をみて、是非とも見てほしい、元気をだして貰いたい、そして木材産業で仕事をしていることを誇りにして欲しい、私の強い思いで実現、一番効率的な夜行バスを2台仕立て実行した。バスは途中時間調整、8時開門、一番入場を目指したが、会場付近が大渋滞となり1時間遅れで到着、入場までまた1時間かかり事前の情報入手が不十分のため大幅に予定が狂った。このように意気込んでの愛・地球博再訪は4月の感動が、残念ながら、9月には落胆と失望になってしまった。4月には白木つくりの各パビリオンが、春の日にさん燃々と輝いていたが9月には日焼けとカビ発生で見る影も無い、木材の欠点がむき出しになりがつかりした。いくつかの欠点をあげると

- ①手すりたも集成材、内装用接着剤、割れ、接着不良、傷みがはげしく痛々しい
- ②建物の壁 日陰部分の黒変 乾燥が悪く 黒ずんで印象がよくない
- ③竹を編んだ日本館は白茶け、黒ずんでいる。
- ④仮設だから・半年で壊すから、この思想がよくない 木材の印象を悪くする
- ⑤劣化防止メンテ不在 すべて白木のまま、むき出しの設計
- ⑥一部メンテもPR不足

10. 結論

- ①4月 感動 一番見たかった木の回廊を見ることが出来た、木と人工木材の比較をみた
- ②9月 落胆 木の傷み方がはげしく痛々しい、材木屋は自己満足してはならぬ
- ③樹種、寸法、使用箇所、使用方法の誤り 外材と国産材
- ④膨大な使用量 使い方によって提案の仕方によって 使われる



CEOメッセージ 第58号

新和風についてー1

少子高齢化社会、洋風化・機能性・合理性の追求、化学製品に囲まれた集合住宅の狭小なリビング、畳、障子、襖、木製建具など和室不要論の台頭、「和」を尊び、畳と床の間、木の天井など、日本古来の伝統の中で、癒し・安らぎ・憩いから明日への活力の源としてきた日本人は、古来の伝統的な和風の住まいは、高齢者にとって郷愁となり、集合住宅しか知らない若年層には、もはや目新しい空間、知らない住まい方だ。地方の旧家では、高齢者と若者の住まい方の違いで、一軒の住宅のなかをリホーム、畳とイス、布団とベッド、障子とサッシ、襖とドアなどで、二重生活スタイルで妥協している。別所帶のような、疎外感、コミュニケーション不足など、特に高齢者の不満がおおく、住まい方を解決すべき大きな問題となっている。伝統的な、和の世界を中心とした洋風との共生、現代の先端を行く若者と、高齢者の住まい方に対する認識、意識の接点を模索、和の世界の安らぎのある「木」を生かして使う使い方はなにか、住まい方の原点は、ゆとり、安らぎ、癒しを、どこで性能と美観、機能と目線、イスと畳、サッシと障子、クロスと天然木、カーペットと木の床、床の間と飾り棚・出窓などの融合、複合の美しさなどから、新しいインテリアの提案が今急速に求められている。 続く

インテリアデザイナー 山本 棟子氏 平成17年10月14日 講演より

CEOメッセージ 第59号

新和風について－2

1950年代に、丹下、清家、菊竹など、著名な建築家の自邸で、斬新的な新しい住まい方のスタイルが、この提案され現代にも参考になる点が多い。

求められている新和風とは、50年代の諸先生の自邸に見られる大胆な提案を参考起点として、日本風土のなかで育った伝統文化の心を大切に、自然の素材を生かし、自由な振る舞いのしやすい、シンプルな空間のインテリア、現代の生活にふさわしい住まい方が期待されている。靴を履かない低めの暮らし、イスとテーブル、畳と座卓の同じ目線が、高齢者と若者のコミュニケーションの原点となるような新しいインテリアこそ、「茶の間ヌーボー」先端的な新和風のインテリアとして注目されている。

新和風インテリアでは、充分でない面積のなかで、空間や目線のとりかた、外部との融合性、気候風土に合った自然な素材として、木、土、和紙、竹、などの特徴を生かして使う部材の詳細を、シンプルにまとめるインテリアエレメントをとの調和をつくることが重要な要素ではないか。

新和風は、経済産業省が平成17年7月発表した新日本様式（Japanesque Modern）として、日本ブランドの確立を目指し、文化力、高度な技術、商品力いかして、現代の日本らしさの生活提言として発表し好評を得ている。

インテリアデザイナー 山本 棟子氏 平成17年10月14日 講演より

C E O メッセージ第60号

新和風について－3

インテリアデザイナーの山本棟子氏のデザインによるチャノマ・ヌーボー（新しい茶の間）は、フランスのカン市で行われた国際博（2002年9月20日～30日）に、特別出展し好評を得た。氏の寄稿、あとむにゅーず142号をご紹介、新和風についてのご理解深めていただければ幸いである。

チャノマ・ヌーボーは日本の伝統的な茶の間をベースにした、世界の家族に向け新しいファミリールームとして、低い生活の提案である。一段あげた和の原点である畳の床、蝶形契のある厚手の和材（せん）のテーブル、明るいかえでの座椅子、光を透かす美しい和紙のスクーリン、赤松のモダーン行灯・漆風床の間、レモンイエローの絹座布団、日本の器や箸などでサステナブルデザインに則した和洋折衷のインテリア提案である。家具調度の使い方や調和のある生活空間は、美しく魅力的、大きな関心を持たれ好評であった。ベースの人気は、靴を履かないタタミの気持ちよい感触や座椅子の座りごこちを試してもらい、抹茶や煎茶のもてなし、夜はサケ・ラウンジと名づけて日本酒や焼酎などで日本の生活を体験してもらった。栓の座卓は彫刻家、ユニット畳は上品なマダム、座椅子と絹座布団は老夫婦、赤松行灯は若い建築家にそれぞれ喜んで引き取ってもらった。手漉き和紙スクーリンと、ユニットタタミ（84X84X2cm）関心が高い。マスコミの関心も高く連日の新聞報道や、ラジオスタジオでの対談もあり、広く日本の生活様式、建築文化を伝えることが出来た。

インテリアデザイナー山本 棟子氏 2005年10月14日講演・あとむにゅうず142号より

コストパフォーマンス中心の住宅、機能性重視の生活様式の変化などにより、日本古来の伝統ある和室が減少、世代間のコミュニケーションが阻害され、社会問題化しつつある今日において、新和風は、干天に慈雨の提案である。素材としては、木材中心であり、木材のよさが際立っているとの印象を受けた。木材不況と嘆く前に、木材は使い方を考えれば需要は無限である、と改めて確信を深めた次第である。改めて山本先生に感謝し申し上げます。

CEOメッセージ 61号

第29回全国育樹祭

萌える緑にひろがる未来をテーマに、10月29日、10月30日2日間に渡り第29回全国育樹祭は、皇太子殿下をお迎えして懇親会は、神戸ホテルオークラ、記念式典、育樹祭は兵庫県三田市で開催された。皇室は皇太子殿下お一人で、雅子妃殿下のご不在はなにか場が寂しく感ぜられた。雅子妃殿下の一日も早いご全快をご祈念申しあげる。

兵庫県は、摂津、播磨、但馬、丹波、淡路の五つの国に分かれており、それぞれ個性のあるところだ。三田市は、但馬の国に属しており、山あいの静かなところだったが、近年ベッドタウンとしての開発が進み人口が激増している。前日の雨も上がり、さわやかな秋晴れのもとで皇太子殿下のご来臨を仰ぎ盛大に行われた。なかでも素晴らしいのは、緑の少年団の活動発表だ。子供たちが、それぞれに、太陽、風、雨、緑の木、土、川などのカラフルな衣装で、ソプラノ歌手足立さつきの歌声にあわせて、自然の恵みを表現したに素晴らしい演技を披露した。林業功労者の表彰のなかで、89歳の林業家が櫻の玉壺を、種から苗木へ、そして成木への育樹に成功したとして表彰された。表彰者は水田 喜太郎さんとおっしゃる89歳のかた、背筋はピンとのび、しっかりした足取りで入場し表彰を受けた。私も、水田さんにあやかりたいものだ。来年開催県の広島県副知事の挨拶、木のうたを参加者全員大合唱し盛況のうちに終了した。名誉ある育樹祭に参加できたのは皆様のおかげと深く感謝申しあげレポートを終わる。



62号

CEOメッセージ

高橋 尚子 悲願の優勝

1月20日日曜日、東京女子国際マラソンが行われた。キュウちゃんこと高橋 尚子が復活をかけて出場する。ご存知高橋は、シドニーオリンピックの金メダリスト、二年前のこの大会でコース記録を狙って無理なロングスパートをかけたために、終盤の上り坂で失速しゴール目前で優勝を逃した苦い経験を持つ、その後もケガが多く、アテネオリンピックも出場できず、不本意な二年間苦しんできた。更に恩師小出監督とも別れて、一本立ちした高橋は今回の大会が、自分の全て決めるレースと位置づけ、不退転の決意で正念場のレースに臨んだ。悪いことに、レース一週間前に右足ふくらはぎ三ヶ所に肉離れを起こしドクターストップを受けたが、押し切っての出場だ。

私はたまたまこの日この時間に偶然に、このレースをテレビで見ていたが、冷静な走りの高橋が、前回敗れた上り坂前に一気にスパートし、後続を大きく引き離し悲願の優勝を成し遂げた。高橋は、アッケラカンとした朗らかな性格で自分は肉離れしていると記者会見で発表した。見方によっては逃げ道作ったか?にみえたが、高橋の性格からすれば、自分の弱点をさらけ出すことにより、逃げ道を絶ったちレースに臨んだのではないか。

優勝のインタビューで、高橋は「悪いことは残さない」「二年間はどん底だったが、必ずカンパックできる、信じて、這い上がる事が出来た」「周囲の皆さんのおかげ」「応援してくださった皆さんへの恩返しは、諦めずに自信を持って臨めば必ずできること、ご参考になれば、お役に立てれば」などなど、このような意味のことだった。成せば成る を正に地でいった東京国際女子マラソンだった。

CEOメッセージ63号

冒険家 三浦 雄一郎さんより教えられたこと

成せば成る

ある会合で、三浦 雄一郎さんに出会った。彼は有名なプロスキーヤ一家の大黒柱、父敬三さん百一歳で今尚現役のスキーヤ、息子はモーグルスキーのオリンピック選手、ご本人の雄一郎さんは、世界最高点エベレストスキー滑降、世界7大陸最高峰スキー滑降を達成、更に70歳にしてエベレスト登頂成功、世界最高齢として記録をもつ、この世界ではなにびとも成しえなかつた世界記録を次々作った偉大なる冒険家だ。三浦さんによれば、一時冒険家の世界から引退したが、このままではだめになる、そこで周囲の反対を押し切って冒険家の世界に戻る決意をした。ここからが三浦さんの凄いところだ、人間は出来ない理由を挙げて、「この歳では」「トレーニングが大変」「どうせ出来ない」などとこれを大義名分とし自分で限界をつくり逃げ込む、なぜか、その方が、楽だからだ、骨をおらずに済むからだ、ところが、自分が冒険家に復帰すると決意したとたんに、人生が変わり、何を見ても新鮮、感覚が鋭敏になってきた。これが不思議だ。もう一つは、どこへ行くにも、鉛の入った登山靴に、登山すると同じだけの重量にしたリックサックを背負い結婚式も、講演会もこれで通した。これはトレーニングだ、楽しみながらしよう、と自分に言い聞かせ実行した。これが二つ目の凄いところだ。何事も人間自分の心がけ次第、できると思えばできるのだ。三浦さんにとって本当によかったです。普段自分の考えていることが、偉大な冒険家の口から語られて本当に嬉しい。このような三浦さんの偉大さをインタビュー記事が日経新聞に掲載された。